

<連載>

# ザイコロジー

④

そだちと臨床研究会

川畑 隆

## カツサンド

カツサンドを食べましょう  
カツサンドを食べましょう  
コーヒーとサラダとそして  
カツサンドを食べましょう  
とってもおいしそうだから  
カツサンドなんて久しぶりだから  
コーヒーとサラダとそして  
カツサンドを食べましょう

僕がカツサンドをひとつ  
タバコの灰の上に落したよ  
君はアララアと悲しんでくれて  
僕は転んだやつが恨めしくて  
君がカツサンドを僕にくれた  
そしてもうひとつ僕にくれた  
僕はレタスを一枚  
君にあげたよ

ニコッと笑う君を見て  
カツサンドがおいしかったよ  
君が食べるって言いだした

カツサンドがおいしかったよ  
スパゲッティもタマゴサンドも  
ハンバーガーもあったけど  
カツサンドがおいしかったよ  
今日の昼ご飯

君と一緒に食べた  
カツサンドがおいしかったよ

## M地下

レタス1枚かい？ プチトマトは？ 付いて  
なかったんです。カツサンドをどこで食べたか  
…M地下です。同志社大学今出川キャンパスの  
明徳館の地下、生協の食堂と売店のあるあのち  
よっと古めかしい空間。でも熱気にあふれてい  
ました。ちくわの天ぷらのA定食が110円、一  
番高いSランチが280円。いつかあのSを食っ  
てやるぞと思いつながら、ちくわの穴から大きな  
カツを覗きました。ちなみにその頃は、銭湯60  
円、市電・市バス60円、王将の餃子が6個で  
60円だったんじゃないかと思います。食堂はガ  
ッカン、学生会館にもありました。王将といえ  
ば、その頃は王将と眠眠が二大勢力。眠眠の餃  
子は少し小さくて柔らかかった気がします。ジ  
ンギスカン定食、湯麺がうまかった…。

そのM地下のカツサンド。当時はそうでもな  
かったのですが、今となってはこの歌が好きで、  
歌ってたら楽しくなります。

## 祭りの夜

祭りのおはやしと 人のざわめきが  
夜の長さをあからさまにする  
歩こうか 人の波にもまれて  
昼間の世界は遠い昔のよう

## ザイコロジー④ (川畑 隆)

ちょうちんの灯りがあやしく照らす  
浴衣姿が長い夜をつくる  
自分の気持ちを言葉にできずに  
君はかえって黙ってしまう

もう何も言わなくてもいいんだよ  
僕の胸に顔をうずめて  
もうすべて空っぽでいいんだよ  
夜の流れに心をまかせて

そんなに苦しい顔はやめて  
心の底におぼれてしまえばいい  
そうだ僕といるそのことだけでいいんだ  
すべては夜の流れるままに

もう何も言わなくてもいいんだよ  
僕の胸に顔をうずめて  
もうすべて空っぽでいいんだよ  
夜の流れに身をまかせて眠れよ

### 静 (しずか)

裏寺町の「静 (しずか)」。居酒屋です。裏寺町にまだあります。それも当時と同じ姿で。同じというのは、店の中の壁の落書きもっていうこと。大学1年の頃から大学対抗春歌 (しゅんか) 合戦を繰り広げたあの場所が、そのまま残っていました。店主の代はかわっても、学生たちの昔を残したかったんじゃないかと思うと、思わず同年代の現店主を抱きしめたくまりました。その静の近くで繰り広げられる祇園祭、そしてその宵山、宵々山…。祭りの夜は長かったのです。

しかし、よく呑みました。「洋酒喫茶」が流行っていた時代です。木屋町の「白夜」とか「ワインリバー」とか。男性バーテンダーでした。ウイスキーのキープは高いので、ジンキープして、ジンライムばかり呑んでました。ところ

が女性バーテンダーにかわったのです。人見知りでとくに女性に弱い私の足は、ワインリバーから遠のいていきました。行きつく先は居酒屋でした。あっ…そこまで書いて、「グラスホッパー」があったんじゃないかと思い出しました。河原町三条東の東宝公衆があったビルの地下、青い光の魅力的な店、生演奏もあったんじゃないかな。友だちとよく行きました。次の『阪急電車』もそこを出てからだったんじゃないかと思えます。いや、グラスホッパー? 違います…グラスホッパーは別のところで、エート…、エスパースジロー???

### 阪急電車

ああ この九時過ぎの河原町の虚しさ  
っていったらない  
酒もさめかけてあいつがいない  
今まで抱いていた肩がない  
とても身近に感じていた温かさが  
ない  
阪急電車よ  
あいつを遠くに連れてかないで  
俺のそばに連れ戻せ

さっきあいつと入ったパブの前を  
通り過ぎる  
きょうもまた終わった短い時間が  
抱きしめたくても抱きしめられない  
帰り道  
あいつを俺の全身に感じていたいの  
に  
阪急電車よ  
俺にかわってあいつを抱きしめろ  
俺にかわってなりふりかまわず  
抱きしめろ

次に逢える日はいつだろうって  
頭の中でカレンダーをめくる

あいつの面影だけ抱いて今夜も眠るのか  
明日からしばらくは  
またそばにあいつがいない  
それが落ち着くのか  
それともいらだつのか  
阪急電車よ  
俺にかわって俺の正直さを出せ  
そして酔い覚めのあいつに  
おまえはどうだって訊いてみる

阪急電車よ  
今日のおまえのその意地悪が終わったら  
今度はあいつを乗せて  
精一杯速く走ってこい

#### いじける

祇園祭の宵山を味わっても、「♪祭りのあとのさびしさが、嫌でもやってくるのなら…」(『祭りのあと』)と吉田拓郎が唄っても、その寂しさを感じるだけの祭りが私にはない…。そして、岸和田のだんじり祭りに心をすっかり持っていて、いじけるのはこんな感じかと思いがらいいいじけていました。北九州の小倉に住んでいたのは小3から高3まででしたが、地元出身でないせいか小倉祇園太鼓には参加のチャンスはありませんでした。『俺にはふるさとの祭りがいい』…このいじけた感じが今でも気に入ってます。

#### 俺にはふるさとの祭りがいい

きょうもまたどこかの街で  
お祭り気分酔いしれてるらしい  
生まれ育った街で親も子も  
顔を見合わせては微笑み合って

きょうもまた知らない街で  
自分たちの祭りを歌ってるらしい  
生まれ育った街で男も女も  
自分たちの役を演じてるらしい  
目をつぶって耳の奥は賑やかで  
遠くのお祭りは頭の中で回る  
俺も走って行って仲間に入ればいいけど  
のけ者の俺の顔が苦笑いさ

俺にはふるさとの祭りがいい  
お囃子の賑やかさがいい  
今夜もまた酒を飲みながら  
一人のお祭りだよと酔いしれる

目の前に浮かんでは消えてゆく  
楽しさに酔いしれた顔 そして顔  
俺にもふるさとの祭りがあれば  
同じ顔ができるかもしれないのに

#### 修学院こそ学生時代

大学に入学して八瀬から修学院へ、卒業してからは香里園から堀川今出川、結婚して楠葉、宇治の小倉、そして今の宇治の黄檗…50年の間に住んで廻りました。それ以前は、鹿児島市の伊敷(いしき)町に生まれてそこに8年、北九州の小倉の大分寄りの朽網(くさみ)に3年、小倉の南貴船の最初の家で4年、次の家で3年、住みました。生まれてからの住みか数を数えると、今の家で11軒目になります。

その中で一番狭い生活空間は修学院の四畳半で、共同洗面所・トイレ・炊事場、徒歩3分のところに銭湯と学生食堂、そして酒屋がありました。学生時代がいっぱい詰まっていた。

その小さな部屋に小さなこたつ、バイトで買ったラジカセ…そして『日曜日の午後』。

日曜日の午後

雪が舞ってるから来ないんですね  
本当は出かけようとしたんですね  
君の足音を聴き分けようと  
僕はドアのほうばかり見つめてました

日曜日の午後 冷たい部屋の中  
時間はどんどん過ぎてゆき  
僕は部屋の灯りをつけました

この前の僕が嫌だったんですか  
僕といるのが楽しくないんですか  
また僕の悪い癖だよ あの時  
君の心をしっかり掴みたかっただなんて  
後悔さ

日曜日の午後 こたつの中  
なんてバカな僕なんだろう  
僕の部屋に来いよなんて  
約束もしていないのに

日曜日の午後 部屋に一人  
ちっちゃく溜息なんかついてさ  
僕はラジオのボリュームを  
いっぱいに上げました

まだ雪はチラチラ舞ってます

Oくんのこと

修学院の下宿を思い浮かべると、Oくんが出てきました。『日曜日の午後』の「君」ではありません、念のため。

Oくんの顔を見つけたのは学生会館大ホールでの日活ロマンポルノ上映後の客席でした。豊田勇造のコンサートや『日本の一番長い日』の

上映会では見かけなかったのにです。高校で同じクラスではなかったけれど見た顔でしたし、大仏さんみたいな顔をしていたので覚えていました。それで声をかけました。彼も見た顔だったようです。それから、馬が合うというか、お互いに呑むのも好きだったので、学部は違っていたのですがつきあいが始まりました。私の下宿はボロボロの四畳半でしたが天井はまっすぐ、彼の下宿は天井は斜めでしたが割ときれいな三畳間でした。いま書きながらそのことを思い出したのですが、当時はそんなことでけなし合ったりして遊んでたんじゃないかと思います。

夕方、私の下宿に彼がやってきて、鍋パーティをするのが定番でした。当時は携帯電話もない大家さんに電話を取り次いでもらったりもしなかったと思うのですが、彼が訪ねてくる日には高い確率で私が下宿にいました。というか、O曜日は大丈夫というような了解事項があったのだと思います。近くのお店に行って、豚肉、豆腐、青ネギ、うどん玉・鍋の具はこれだけだったと思いますが、ビールの大瓶5本も併せて買いました。ビールが足りないときのために、安い赤玉ポートワインを買うこともありました。日によっては足を延ばして「修学院プラザ」で100円の鶏の皮の唐揚げも買いました。代金はもちろん割り勘です。買い物を終えていそいそと部屋に帰り、渦巻コイルの電熱器に鍋を載せました。鍋が煮立ち、ビールを注いで乾杯！のタイミングで、同じ下宿のMくんが部屋をノックするという、ありきたりの話なのですが、そういうことがよくありました。よくあったということは、Mくんは狙ってたのかもしれませんが。心の広いOくんと私でしたから、歓迎モードにはならなかったもののMくんにご馳走しました。次の回からはMくんが来ないようにと祈りながら準備をしたのを覚えています。不安は繰り返し現実になったわけです。

〇くんもよく呑みましたが、私もよく呑みました。いったいどれくらいの量を呑めるのだろう、それをいっぺん試してみようということで、夏の暑い日だったと思いますが、私は日本酒の一升瓶を抱えて彼の下宿に行きました。すると、今日はもう呑んだということで彼が横になっているその横で、私1人で呑むことになりました。茶碗酒です。喉が乾いていますからどんどんいけます。そしてそのまま眠ってしまいました。目を覚ましたとき、右手は茶碗を握ったままでした…というか、きっと茶碗に手をそえたままの形がテーブルの足によって支えられていたというのが正確じゃなかったかと思います。一升瓶をみると3合ほどが残っています。〇くんは呑まなかったそうですから、私1人で7合を呑んだこととなります。2人以上で一緒に呑むなら7合もあり得るでしょうが、1人で7合はたいしたもんじゃないでしょうか。無理にでも「たいしたもん」にしたかったぐらい、しょうもないことに青春をかけていました。

〇くんは卒業後は郷里に帰って会社に勤めました。結婚披露宴でスピーチを頼まれた私は、日活ロマンポルノでの出会いを話しました。彼の友人たちからは大受けでしたが、彼のお母さんからはやんわりとにこやかに、おそらく批判されました。その後、彼はお父さんの後を継いで会社の社長になりましたが、京都で一度呑んでから20年以上会っていません。どうしているでしょうか〇くん、そしてMくんも。

#### そこにはいない人のこと

次の『つかのまの主人公』は就職して以降に書いたものですが、『日曜日の午後』と重なるところをはじめて見つけました。そう見ると他の歌詞もそうですが、相手がそこにはいないことが私にはテーマになるようです。

#### つかのまの主人公

いつ花は散ってしまうかもしれない  
ふとそんな思いにとらわれてしまう  
あなたがいつも座ってる椅子を見つめて  
すすり泣いてみたりする  
あなたの顔が私に笑いかけるほど  
私から遠ざかってゆく  
そんなとき癖のある足音が  
私をあなたに引き戻す

つかのまの主人公 悲劇のヒロイン  
またあなたがいるのが当たり前  
当たり前前の日常に入ってゆく私

何気ないこの毎日の中で  
昨日と同じ風を感じることもある  
当たり前前のことがとても際立って  
私に問いかけてくる  
あなたのおどけた格好が  
私を抱きしめて遠ざかってゆく  
そんなとき玄関のチャイムの音が  
私をあなたに引き戻す

つかのまの主人公 悲劇のヒロイン  
またあなたがいるのが当たり前  
当たり前前の日常に入ってゆく私

ザイコロジー⑤と⑥では、就職してから以降の歌詞等を取り上げる予定です。